



常春の大島

ひよ鳥の渡来する 11 月に椿の花が咲き初めて冬中咲き乱れ 4 月にひよ鳥の去ると共に花が終る。常春の島椿の島と謠われた大島も昭和の始め松本某なる一女学生が『さよなら』の声と共に御神火三原山の火口に飛込んでからは火山三原山としての学術的立場よりも歌や詩の島として一躍天下に知れわたり、島を訪れる観光客も日に日に増大し、又昭和 25 年 26 年の 2 回に亘る噴火により全く観光地と化し、毎日東京一大島、伊東一大島間に夫々往復、千屯級の客船が就航し、発着港元村は土産品店、旅館軒を並べる繁栄ぶりです。

住む人のありとこそ聞け大島の

山も浮きたる五月雨の空

と詠じられた島も今は六カ村人口 1 万 3 千を数え、近代文化も行き互り、三原山頂で熔岩や噴煙とテレビの放送を同時に見物できるようになりました。

この島の北側外輪中腹海拔 200 米の所に、敷地 1 万余坪をようし、鉄筋コンクリート、2 階建白聖豪華な大島測候所があります。

昭和 13 年春、堀口捨己氏の設計により、風力塔の高さ 25 米、建物の一部には大島の気候、風俗、産物及び三原山、その他の火山の参考品、図表写真等数百点を陳列した参考館があります。

昭和 28 年 10 月 2 日噴火を開始、29 年 1 月 27 日旧火口底に約 61 万立方メートルの熔岩を流し未だに完全に活動を終息していない三原火山の観測の為、測候所にはウ式地震計、偏角計、山頂観測所には石本式地震計、偏角計を設置し、常時記録をとり、又週 2 回火口周辺の地形測量 25~26 年及び 29 年流出の溶岩温度の観測等実施しております。

全島殆んど天水を利用している島の生活では水爆実験以来放射能雨におびやかされ、時として寝具中にしのび込む、むかでに顔色を変え交代勤務のため夜中宿舎からの暗闇でまむしの夕涼みにどきもをぬかれながら職員 25 名の毎時観測を始めとして、予報、地震、火山、検潮とひろい範囲の仕事を受持つて、南に三原山を眺め、北と西に遙かに内地の山々を望み乍ら清浄な空気の下で元気に働らいております。(大島測候所小黒久雄)

編集後記

10 月に引続き 11 月号の編集を担当したが、10 月号に誤植が非常に多かったことをまずおわびします。11 月は大方の御助力により、災害特輯的なスタイルでまとめあげることができた。地方からの投稿が少いが、地方的問題についての調査結果はもろろ編集についての御意見もあればどしどし投稿していただきたい。

(11. 15. 奥田)